

沿海集落の立地特性と空間構成に関する研究(その2)

日大生産工 (学部) 縣 真之介
 日大生産工 宮崎 隆昌
 日大生産工 (院) 山本 健司

1. はじめに

前稿に引き続いて三重県沿海集落を対象とし、本稿(その2)では、住居の視点から集落の空間構成を分析し、沿岸域集落と離島集落を比較・検討及び考察する。

住居の視点からの分析とは、1.住居のエントランス方位及び棟方向、2.間取りの分類及び各集落における各間取りの分布、3.各集落の住居内空間における「距離感覚」による分析である。

2.分析・検討事項

1) エントランス方位と棟方向による分析

住居における屋敷地は、自然条件・地形条件及び道の関係から形成された集落の道に取り付くように配置されると考えられる。また、住居は敷地内において、家屋の配置やエントランス、庭の取り方などの諸条件を自由に決定でき、それゆえに、それぞれの個として柔軟性を持っているが、屋敷地は道からのアクセスや視線、方位などによって規定を受けている。

よって、各集落における屋敷地の様々な特徴をエントランス方位と棟方向の関係から分析し、沿岸域集落と漁業集落とで比較する (Fig.1, Fig.2, Tab.1)。

Tab.1 各集落のエントランス方位及び棟方向

集落名	風向	エントランス方位	棟方向	海的位置	山的位置
紀伊長島 (沿岸域)	==			南	北
相賀浦 (沿岸域)	==			西	東
阿曾浦 (沿岸域)	==			東西	南北
答志 (離島)	↓			東	西
和具 (離島)	↓			東西	南
桃取 (離島)	↓			東西	南
菅島 (離島)	↓			北	南



Fig.1 エントランス方位及び棟方向(紀伊長島・房状)



Fig.2 エントランス方位及び棟方向(答志・格子状)

沿岸域集落における風向きは、一年を通して東西方向の風が多い。よって、沿岸域集落におけるエントランス方位は、東西方向の風の影響を少なくするために南側に位置している傾向が強く見られる。棟方向に関しては、東西軸に向けられている傾向が見られた。

沿岸域集落である紀伊長島(Fig.1)に関しても、先に述べたことが言える。紀伊長島は南側に海岸線を持ち、道の形状は海岸沿いの主要道路を軸として房状をなしている。その房状の道に取り付くように住居が配置され密集し、一戸あたりの風の影響を防いでいる。

離島集落における風向きは、1年を通じて北(北西・北北西)からの風が多い。よって、離島集落におけるエントランス方位は、沿岸域集落でも見ら

れたように風向を避ける方位に位置する傾向が見られる。また、軸方向は南北軸に向けられる傾向が強く見られる。

それは、海岸線に対して垂直な路地を格子状に構成することによるものであると考えられる。また、各住居を密集させることによって、一戸あたりに受ける風の影響を軽減させている。更に、風向と同じ軸方向に住居を配置することによって、風の通しをよくし、集落内の奥まで風を取り込むことを可能にしている。

離島集落である答志(Fig.2)においても先に述べたことが言える。答志は、北側に漁港を有する海岸線があり、漁港から広がる集落の中心部は平坦地であるため風の影響を受けやすい。道の形状は格子状であり、沿岸域集落でも見られたようにここでもまた住居を密集させることによって風の影響を軽減させている。

2) 間取りの分類及び各集落における間取りの分布による分析

各集落とも地形条件に制約された限界環境の下で、住居が漁港近郊に密集し、集落を形成しているゆえに、それぞれの住居の敷地面積は狭小である。そこで、漁業集落における住居の平面構成を類型化するにあたり、まず主要居室(納屋・倉庫を除く)の構成により、並列型・併列型・横三間型・縦三間型・田の字型・四間型・食い違い四間型・広間型・中廊下型の9種類に分け(Fig.3, Fig.4)、各集落における構成の分布図(Fig.5)から沿岸域集落と離島集落を比較する。

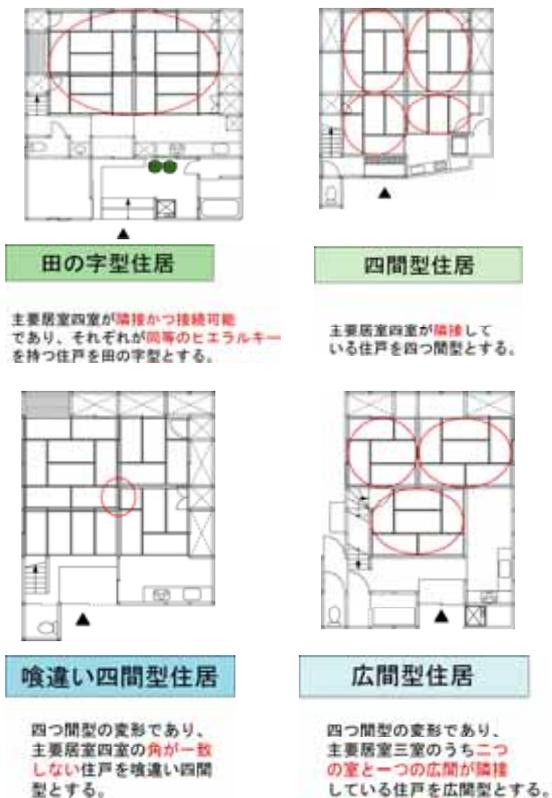


Fig.3 住居平面構成の類型化(その1)



Fig.4 住居平面構成の類型化(その2)

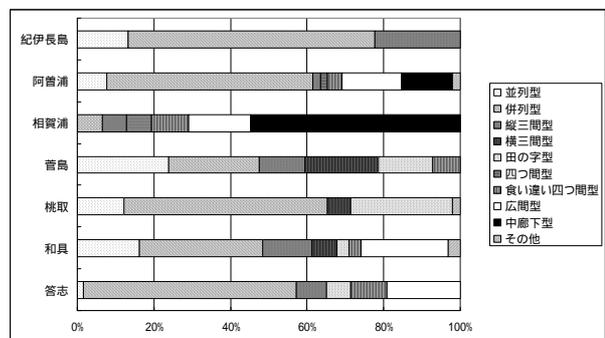


Fig.5 各集落における住居平面構成の分布

これらの結果(Fig.5)を相関的に見ると、漁港近傍の背後地という限られた領域内で住居が密集する高密度住空間であるため、各住居は必然的に外部と直接に接する面積が小さくなり、間口が狭く奥行きが長い並列型・併列型が多く存在する。特に、相賀浦を除いた各集落では、併列型が最も多いという結果が出た。相賀浦では、中廊下型の住居が最も多く見られた。以下に集落の最も高密度であると思われる部分の単位面積(1ha)あたりの建物数(建物密度)を示した表と、それをグラフ化したものを示す(Tab.2, Fig.6)。これにより、相賀浦は最も建物密度が低い集落であることがわかる。故に、相賀浦は家屋面積に余裕が生まれるため、中廊下型の住居が最も多く存在しており、それは相賀浦が主農従漁の集落である事によると考えられる。

Tab.2 各地域におけるグロス密度

	総人口(人)	総世帯(世帯)	建物密度(戸/ha)
答志	1463	333	128
和具	578	160	99
桃取	942	266	89
菅島	828	216	84
相賀浦	907	322	67
阿曾浦	1225	537	161
紀伊長島	11045	4349	124

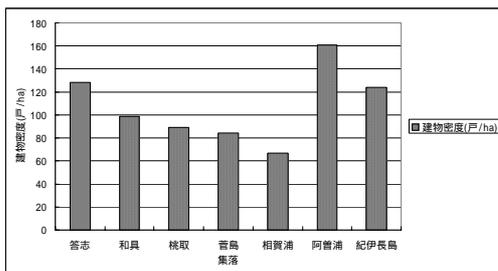


Fig.6 各集落におけるグロス密度のグラフ

3) 住居内部空間における「距離感覚」による分析

居住者へのヒアリング調査から、住居内部空間における居住者の利用頻度及び使用時間が長いことが予想される台所・居間での特定の居場所(以下、利用位置と記す)について検討する。居間・台所における居住者の利用位置(記号「D」,「H」)、出入口において近隣住民が居る状況を想定しての、出入口における近隣住民の利用位置(記号「N」)の平面的位置関係を調べ、それら三つの利用位置間の距離(常態間距離)を各集落で算出し、離島集落と沿岸域集落との比較を行う(Fig.7, Fig.8, Tab.3)。

Tab.3 各集落の漁業形態について

	漁業形態	属人漁獲量	属地陸揚量	人口	全世帯数
答志	純漁村	4,725t	3,823t	1500人	356世帯
和具	主漁従農村	1,261t	1,690t	601人	153世帯
桃取	半農半漁村	2,772t	2,772t	995人	261世帯
菅島	純漁村	1,514t	1,597t	848人	215世帯
阿曾浦	純漁村	1,057t	1,028t	1314人	500世帯
相賀浦	半農半漁村	689t	214t	937人	325世帯
紀伊長島	市街地漁港漁村	6685t	6685t	11045人	4341世帯

平成12年国勢調査、平成14年港勢調査



Fig.7 間取り上にプロットした利用位置の例

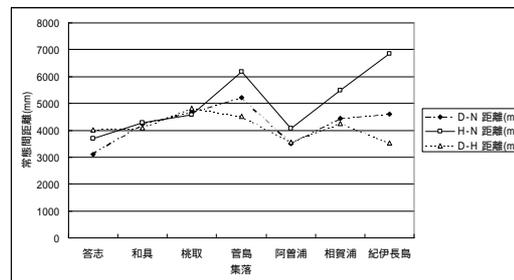


Fig.8 各集落における常態間距離

Fig.8は集落ごとの常態間距離の平均値を算出し、グラフ化した結果である。D-N距離とH-N距離を比較してみると、比較的全集落においてD-N距離の値のほうが、H-N距離の値よりも低い結果が出ている。これにより、各集落とも外部と接しやすい場を台所よりも居間の、ある特定の位置に設定する傾向が強いと言える。

また、既往研究において、離島集落での常態間距離は、漁業従事地帯の占める割合が高い集落ほど家族同士の距離よりも近所との距離をより短くする傾向が見られるという結果を得ている。各集落の中で、最も漁業従事地帯(漁家)の占める割合が高いと思われる純漁村の答志島に関して見れば、D-N距離の値が最も低く、次いでH-N距離、D-H距離の順に距離の値が高くなっていく。ゆえに答志では、台所よりも居間の一部を外部へと接する場に選択し、更に家族同士の距離よりも近

所との距離を短くとっている傾向が見られる。

沿岸域集落である阿曾浦・相賀浦では、D-N 距離と D-H 距離がほぼ同等の値であり、いずれも H-N 距離よりも短く、家族同士の結びつきを維持しながら、近所とも同等の距離感覚を保とうとしていると考えられる。また紀伊長島では、D-N 距離よりも D-H 距離の値の方が低く、家族間での距離を短く取っている。それは、町家的性格を持つ地割・住居平面を持つことによると考えられよう。

3.総括

本稿では、住居の視点から集落の空間構成上の特徴を 3 つの分析方法を用いて分析した。ここでは、それら 3 つの分析方法から得られた結果、及び立地条件の異なる沿岸域集落と離島集落との比較をまとめたものを以下に示す。

：住居のエントランス方位及び棟方向による分析のまとめ

沿岸域集落・離島集落どちらも風の吹く方向にはエントランスを配置していない。ゆえに、エントランス方位は沿岸域集落・離島集落ともに風向を避けるようにエントランスの方位が選定されていた。

棟方向は、沿岸域集落・離島集落どちらも風向と同じ方向に棟方向を向けている傾向が強く見られる。そのため集落の奥まで風を送ることが出来る配置になっているが、どちらの集落も風の影響を防ぐために密集して住居を配置している。

：間取りの分類及び各集落におけるその分布による分析のまとめ

高密度集住空間では、必然的に外部と直接に接する面積が小さくなり、奥行きよりも間口の短い住居が多く存在する。相賀浦を除いた各集落では、併列型の住居が最も多く、建物密度の最も低い相賀浦では、中廊下型の住居が最も多い。

：各集落の住居内空間における「距離感覚」による分析のまとめ

比較的全集落において D-N 距離の値の方が H-N 距離の値より低く、外部との接しやすい場を居間に設ける傾向が強い。離島集落では、最も漁業生産の占める割合が高い集落ほど家族間の距離よりも近所との距離の方を短くする傾向があるといえ、沿海集落では、D-N 距離と D-H 距離がほぼ同等もしくは D-N 距離の方が短い値であり、どちらかと言えば、家族間の距離を維持し、近所との距離も保っていると言える。

これらの結果及び分析(沿海集落の立地特性と空間構成に関する研究(その 1)を含む)を通して、立地条件の異なる沿岸域集落と離島集落について比較する。

それぞれの集落の構成は地形に影響され、形を成している。沿岸域集落及び離島集落はそれぞれ異なった立地条件であるため地形の要素についても異なり、地形・道・住居という順序の構成から集落は成り立つ故に、集落の構成も異なる部分が

多々見られる。住居の構成では、風の影響が強く見られ、集落のエントランス方位や棟方向を決める大きな要因になっている。

また、生活環境にしても両集落の間には違いが見られる。離島集落では、漁港のみが本土につながる出入り口であり、今もなお漁業生産の占める割合が比較的高いこともあり、漁港に近い内部空間よりも屋外空間と密に接しながら未だに公私の未分化が見られる。一方、沿岸域集落では、交通手段が海上交通のみでなく、陸上交通も発達しているため、屋外空間との接し方は離島集落よりも希薄になり、広域化している為、公私の区分や室の分化が進んでいると考えられる。

文献

- 1) 山本健司・宮崎隆昌：離島集落における空間構成上の特性と個と集団の「距離感覚」の関係性、日本建築学会計画系論文集、第 583 号、pp.9-16,2004.9
- 2) 山本健司・宮崎隆昌：離島集落の各住居における収納と住居間距離の関係性について-高密度集住空間の各住居同士の「間合い」-、日本建築学会技術報告集、第 18 号、pp.257-262,2003.12
- 3) 宗正敏、宮崎隆昌：沿岸漁村地域に於ける集落の構成と特性(志摩・熊野灘沿岸地域の整備計画に関する調査・研究その 1)、日本建築学会論文報告集、第 270 号、pp.117-125,1978.8
- 4) 宗正敏、宮崎隆昌：沿岸漁村地域に於ける複合集落の類型的性格について(志摩・熊野灘沿岸地域の整備計画に関する調査・研究その 2)、日本建築学会論文報告集、第 271 号、pp.95-103,1978.9
- 5) 大内宏友、宮崎隆昌、宗正敏：漁協を中心にとらえた漁港と集落の圏域の構成に関する実証的研究-沿岸漁村地域における圏域の構成その 1-、日本建築学会計画系論文報告集、第 369 号、pp.72-81,1986.11
- 6) 大内宏友、宮崎隆昌、宗正敏：漁協を中心にとらえた圏域の特性とその変容に関する実証的研究-沿岸漁村地域における圏域の構成その 2-、日本建築学会計画系論文報告集、第 382 号、pp.77-86,1987.12
- 7) 池井昭夫：漁業集落の研究とその方法についての考察(漁村計画の方法に関する基礎的研究・その 1)、日本建築学会論文報告集、第 237 号、pp.135-145,1975.11
- 8) 池井昭夫：漁業集落の構造度・構造型と構造類型(漁村計画の方法に関する基礎的研究・その 2)、日本建築学会論文報告集、第 238 号、pp.79-90,1975.12
- 9) 小泉正太郎、三國政勝：漁業地区における住居及び近隣の空間形成に関する研究-その 1 千葉県勝山漁業集落の調査を通して-、日本建築学会論文報告集、第 312 号、pp.123-132,1982.2
- 10) 仙田満、金城むつみ、尾関昭之介：建築の個体距離に関する研究-住宅デザインコードと外部空間計画、日本建築学会計画系論文報告集、第 423 号、pp.41-48,1991.5
- 11) 仙田満、矢田努、尾関昭之介：住み手の意識から見た建築の個体距離-建築の個体距離に関する研究(その 2)、日本建築学会計画系論文報告集、第 435 号、pp.33-40,1992.5
- 12) 古賀紀江、高橋鷹志：一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察-高齢者の住居における居場所に関する研究その 1、日本建築学会計画系論文集、第 494 号、pp.97-104,1997.4
- 13) エドワード・ホール：かくされた次元、日高敏隆・佐藤信行訳、みすず書房、1970
- 14) 金栄興・高橋鷹志：密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 469 号、pp.87-96,1995.3
- 15) 長坂大：集落における屋外空間の構成と変遷についての研究、日本建築学会計画系論文集、第 495 号、pp.271-279,1997.5
- 16) 寺内美紀子・坂本一成・奥山信一：建築の外部空間の分節と配置形式、日本建築学会計画系論文集、第 491 号、pp.91-98,1997.1
- 17) 鈴木成文：「いえ」と「まち」、鹿島出版会、1983
- 18) 小柳涼・宮崎隆昌：集住空間における空間構成上の特性-路地と敷地・住居の関連について-、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-2 分冊、pp.647